

小規模日本人学校の組織的運営に関する一考察

— 少人数で機動力のきく各組織を機能的に結びつける企画会議の持ち方 —

前バンドン日本人学校 教頭

群馬県甘楽郡下仁田町立小坂小学校 教諭 網 中 徳 昭

キーワード：学校運営，企画委員会，学校運営委員会，PTA，組織

1. はじめに

インドネシア共和国第3の都市バンドンは、標高600mから800mの高地にあり、学校のある位置は、最高気温が25度程度で涼しく、休日には避暑地として、多くの観光客がジャカルタからやってくる。生活もしやすく、一年を通して冷暖房器具は必要がなかった。また、歴史的には、スダ民族の都として栄え、インドネシア独立の象徴であり、国民的な歌「ハロハロバンドン」にも歌われたラウタンアピの舞台となった。現在は、数多くの大学を抱える学園都市となり、それぞれの大学から輩出された人々は、この国の基盤を担う人材として各方面で活躍している。このように、バンドン日本人学校は、自然環境にも学習環境にも恵まれた立地条件の中、バンドンジャパンプラブによって運営されてきた。

本校は、在籍児童生徒を囲んで、学校を組み立てている3組織がある。小規模な学校であるため、学校を構築している各組織が、組織全体としてスピーディな情報伝達や意思決定ができ、それぞれの案件に対し、説明、報告、協議、決裁が短時間でできるメリットがある。しかしながら、学校運営に関わる各組織のスピーディな意思決定は、時には、各組織間の意思疎通でのずれをまねくことが見られる。それぞれの組織の意思疎通をはかり、子どもたちのために、各組織が連携して一つの学校を組み立てられるように、各組織が行う会議の連動性を持つ必要があった。

そこで、3つの組織が運営する各会議にすべて出席できるメリットを生かし、各組織が持つ意見やさまざまな需要の橋渡し役として、迅速に対応していくことを考えた。2年間各会議に参加しながら、担当した内容と心がけてきたことを述べることにする。

2. 組織運営の実際

(1) 各組織について

本校では、在籍児童生徒を囲んで、学校組織、学校運営組織、PTA組織の3つの組織で学校を組み立てている（図1参照）。各組織には、それぞれの組織における企画・運営内容を検討する会議（以下企画会議と称する）、全体会議、実施の3部門がある。この中で、国会であれば各委員会にあたる部分が、企画会議であり、それぞれに企画委員会、運営委員会、マンガスの会の名称が付けられている。小規模校であるために、2つ以上の組織に関わる人間が、すべての部門にいる。

(2) 各会議で実践してきたこと

	学校（企画委員会）	運営（学校運営委員会）	保護者（マンガスの会）
担当した内容	<p>事前の個別打ち合わせ 司会 担当分掌・行事の提案 臨時打ち合わせの招集進行 学校運営委員会議決伝達 マンガスの会議案伝達</p>	<p>事前の個別連絡 事前の個別打ち合わせ 司会 職員会議議決事項の提案 危機管理の提案 施設・設備関係の提案 学校職員についての提案</p>	<p>事前打ち合わせ 職員会議議決事項の提案 学校運営委員会議決伝達</p>
心がけたこと	<p>参加者が多角的、多面的な視点でものごとを捉え、発想の視野を広げられるよう、参加者へ事前準備をお願いし、提案しやすい場の雰囲気作りを心がけた。また、条件に適した企画が選択できるよう、代替案を抽出することで、最適な選択が何らかの理由で実行不可になった場合でも、すぐに次の代替案を選択できるよう意見を求めた。</p>	<p>学校の教育、将来、運営、危機管理に対して、全運営委員が積極的に関われる手だてを計画・提案するようにした。また、日本人学校は、環境および情勢の変化により、様々な問題点を派生させる。そこで、小規模校の特長を生かして、検討事項や問題点を全員で把握し、全体視点の立場で危機意識を共有するために、問題点とそこから派生する影響を参加者全員が把握できるような提案書類のまとめを心がけた。</p>	<p>職員会議での議決事項を明確にした上で、「目的は、学校の教育を、常に最高の状態にすることのただ一点に尽きること」を共通認識し、「ただし、目的は一つでも、目的を達成するための手段は必ずしも一つであるとは限らない」と言うことを分かってもらうように伝達内容をまとめた。その上で、参加者である保護者の学校に対する願望を受け、それを達成するための手段を細分化して、多面的、多角的に意見を次回会議で提案した。</p>

(3) 各企画会議を通して

ねらったことは児童生徒を取り巻く、それぞれの組織がそれぞれに機能し、かつ、効果的に結びつくことで組織をあげて最大限の教育力を発揮することであり、さらに、もう一歩進めて、関わる人たち全員が、「子どもたちの教育」という共通の目的と課題をもっているという認識のもとに、学校内の雰囲気をつくっていくことだった。

日本人学校は時代背景に沿い、バランスがとれた運営を行わなければならない。その立場に立った上であっても、最も大切なことは、やはり人と人とのつながりであり、各組織のバランスだと感じる。各組織に関わるそれぞれの人たちが、ありきたりではあるが、各組織の中でお互いを信頼し合いながら、また、それぞれの組織を認め合いながら、自分たちに与えられた任務を遂行し、課題を解決していくことであろう。

図 1

平成21年度

